

琉球大学学術リポジトリ

スピーチ・コード理論とアメリカ社会の多様性

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学アメリカ研究センター 公開日: 2012-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮平, 勝行, Miyahira, Katsuyuki メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/24682 |

スピーチ・コード理論とアメリカ社会の多様性

宮 平 勝 行

法文学部助教授

I. はじめに

同一の言語を話す人の間でも、地域によっては（もしくは民族や世代によっては）言語の行使について様々な（暗黙の）コードがある。「ことば¹の意味はその使用にある」という視点に立つと、ことばの使用に関するコードが異なることによって同一の発話行為がさまざまな異なる結果をもたらすことがある。どのような場面において話すことが奨励され、どのような状況において話すことを敬遠するのか、そしてことばは人と人の相互行為の上でどれだけの重みを持っているのか、それぞれの言語共同体で文脈とことばのコードに応じて決まってくる。こうしたことばのコードが隠語を生み、若者ことばや忌みことばなどの習慣を作り上げるといえる。コミュニケーション行動のコードに従うこと（もしくは違反すること）によって、その人の自己概念（アイデンティティ）や特定のグループへの帰属関係などが言外に示されることは、ことばが単なる伝達的手段ではないことを物語っている。ことばのなまり一つを取り上げても我々はそこに自他の違いを認識し、コミュニケーション行動に変化がもたらされる。このように見ていくと、ことばは人と人を結びつけ、社会を形成するシンボルであり、個人がアイデンティティを体現する手段でもあると言える（Condon & Yousef, 1975）。コミュニケーションの研究はことばのこのような社会的、心理的、存在論的な側面に注目して行われる。

小論ではことばの分析を通して見えてくるアメリカ人の「自己」と「社会」に関する意識をスピーチ・コード理論に沿って考察する。アメリカ合衆国の様々な文化を対象に行われた事例研究を取り上げ、その成果を横断的にみることによって、アメリカの人、社会、そしてコミュニケーションの持つ意味を当事者の視点からとらえる。そうすることによってアメリカ社会の多様性と複雑な社会構造をより深く理解することに努める。また、ことばの民族誌研究の発展の系譜をたどり、コミュニケーション研究とアメリカ研究の接点を模索する。具体的な事例研究を検証してわかることは、コミュニケーション研究はあらゆる地域研究にとって有効なひとつの視点と手段を提示してくれることである。

II. ことばの民族誌からスピーチ・コード理論へ

言語研究においては伝統的にことばを一定の規則に基づいて形成される心的構造物としてとらえ、そ

¹ 本稿では「ことば」をもっぱら話しことば (spoken language, speaking) と位置づけ、コミュニケーション行動と同義でとらえる。その一方で、文字やテキストを含む書き言葉を示すこともある「言語」と対比して用いる。

の規則の解明に取り組んできた。1960年代において、こうした大きな時代の流れに反して、ことばを人間行動の一環としてとらえ、コミュニケーション行動がなされる文脈や言語共同体の社会・文化的な背景に注目した記述的な言語研究を提唱したのはほかでもないHymes (1962) や Gumperz (Gumperz & Hymes, 1972) であった。コミュニケーション行動のもたらす意味はその行動がなされる文脈によって様々に変化し、それぞれの文脈において人は適切な規範に準じた行動で、相互にコミュニケーションの意味を構築していく。たとえば挨拶、依頼、謝罪、誓約、冗談といった具体的なコミュニケーション行為が食卓を囲んでの家族の会話や職場での会議、友人同士での宴会といった席でどのように行われ、どのような結果をもたらすのかといったことに注目するには、民族誌学的な詳細な記述研究が求められるのである。

こうした初期の提言以来10年を経た1972年にHymesは、10年間の成果を反映させた新しい分析の枠組みを「ことばの民族誌」という名称で世に問うた (Hymes, 1972)。彼が求めていたものは多くの事例研究に裏打ちされた包括的かつ綿密な分析のフレームワークであった。様々なエミク (emic) な事例研究から捨象したエティック (etic) な分析方法を確立し、そのフレームワークを用いて他の多くの言語共同体においてことばの研究を行う。こうして収められた研究成果を比較対照することによって民族・文化間に見られる人のコミュニケーション行動の普遍性と特異性を明らかにしつつ、当初の分析フレームワークをどのような言語共同体にでも適用できるものに完成させることをHymesは目指した。そうした試みを重ねることによって、ことばの文化的特異性と普遍性を明らかにするのが彼の究極の目標であった。初期のフレームワークは改編を重ね、スピーチ・イベントの構成要素はSPEAKING²の頭文字で広く知られるようになる。コミュニケーション行動をありのままの姿で、実際の現場でとらえた上で分析しようとする彼の提言は広く受け入れられ、40余年を経た現在、社会言語学 (Gumperz & Hymes, 1972)、文化人類学 (Bauman & Sherzer, 1989; Keating, 2002)、談話研究 (Schiffrin, 1994)、コミュニケーション研究 (& Philipsen & Carbaugh, 1986; Katriel, 1986; Carbaugh, 1990; Philipsen, 1992, 2002) などの分野で大きな進展を遂げている。

このように様々な分野に影響を及ぼしたことばの民族誌は、コミュニケーション研究の分野においても伝統的なレトリックの研究と融合する形で導入された。シカゴ近郊のイタリア系移民のコミュニティにおいて少年指導員の仕事に携わっていた Philipsen (1972, 1974) は、同じ英語を話す少年たちと自分の間では話すコードが異なることに気がつき、ことばの民族誌研究に取り組む。Teamstervilleと彼

² SPEAKINGの各文字はそれぞれSetting (背景), Participants (参加者), Ends (目的), Act sequences (行為連鎖), Key (話しの調子), Instrumentalities (話しの形態), Norms (相互行為と解釈の規範), Genres (話しの類型) を指す。これらの項目のなかで難解だと思われるAct sequences (行動連鎖) とは、沈黙、笑い、ジェスチャー、参加者相互の協働を含めた意味形成の過程を指す (Keating, 2001)。また、Instrumentalities (話しの形態) は、用いられる言語の異形、コード、言語使用域やコミュニケーションの経路、さらには話しことばや書きことばなどの違いなど、コミュニケーションの形態が相互行為に及ぼす影響に注目する。KeatingによるとGenres (話しの類型) に関しては、文学作品の分類と同じように、〈なぞなぞ〉、〈ジョーク〉、〈手紙〉、〈口争い〉などのジャンルに分けることによってその特徴をとらえようとしたため、結果的にスピーチ・イベントと同じ名目になることがしばしばある。Hymesの提唱した理論モデルは、これらをスピーチ・イベントの構成要素とみなし、それぞれの言語共同体に存在するコミュニケーション行動の多様性を細部にわたって記述することによって、当該言語文化の独自性を明らかにしようと試みた民族誌的アプローチである。

が名付けた地域での研究結果は新しい試みとして*Quarterly Journal of Speech*という主要学術誌に発表され注目を集めた。その後Philipsen (1992, 1997, 2002) は、Burke (1969) の劇作法的社会理論 (dramaturgical model) やTurner (1980) の社会ドラマ理論 (ritual and social drama) などを取り入れながら、スピーチ・コード理論 (speech codes theory) を提唱する。コミュニケーション行動を演劇やドラマに例えることによってコミュニケーション行動の規範や意味を当事者たちの視点に立って理解しようとする理論モデルである。

スピーチ・コードとは「社会的に構築されたシンボル、意味、前提事項、そしてルールの体系でコミュニケーション行動に関するもの」とPhilipsen (1997, p. 126) は定義している。「社会的に構築されたシンボル、意味、前提事項、そしてルールの体系」とはすなわち文化を指しており、スピーチ・コードとはことばにまつわる文化コードとすることができる。スピーチ・コード理論においてPhilipsenは、ことばは全ての場面において地域文化の特色を帯びているというわけではなく、同じ場面においても文化的な特色を帯びたものとそうでないものがあるとしながらも、一方で文化の特色を色濃く内包したことばがあることも確かであると主張する。文化的特徴を内包したコミュニケーション行動を文化的コミュニケーション (cultural communication) と呼び、そこにはふたつの大きな定理と五つの命題がはたらいっていることを唱えている。

公理 1：言語共同体の会話はその共同体に特有なコミュニケーション行動の方法と意味の痕跡を内包している。(Philipsen, 2002, p. 53)

ここで言う「言語共同体の会話」とは、社会的・歴史的な文脈のなかで共同体のメンバーが相互に構築し、表現し、生活の上で交渉していくための会話である。その意味で特別なコミュニケーション行動であるが、「共同体の会話」と呼べるものは全てにおいてその共同体の特異性を示す痕跡を見ることができる。その痕跡は民族誌学的な調査によって詳細に記述し解明されるべきものである。コミュニケーション行動の「方法」とは、ある時と場で用いる特定の言語や方言、コミュニケーション・スタイル、慣習化した表現、会話の進行や解釈のルール、話し方、(特別な意味を持った) 話しの類型などを指す。それぞれの地域共同体の民族文化の特異性はこのようなコミュニケーションの方法のなかにも様々な形で豊かに息づいているとする考え方である。コミュニケーション行動の「意味」とは、上記の独自な方法で行われた「共同体の会話」が、当事者たちにとってどのような文化的な意味をもたらすのかを考慮している。特定の時と場所において行われるあるコミュニケーション行為を共同体のメンバーがどのように把握し、どのような行動を適切であり、理解可能であり、有効であり、こちよいなどと判断するかを相互行為の上で広範に「意味」するものと位置づけているのである。「文化の探求は実験に基づく一般法則の探求ではなく、意味を探求する解釈学的な営みである」と言ったGeerts (1972, p. 5) の理念に即して、スピーチ・コード理論においても当事者が経験することを当事者の視点から把握することをひとつの原則として謳っている。

コミュニケーション行動の方法と意味に注目して行われた多くのフィールドワークを広く分析した上でPhilipsenは、三つの主題化が各社会グループによって独自の方法で行われることに注目する。コミュニケーション行動を観察することによって、(1)発話者が理想としている、グループのなかで観念化された人物像、(2)社会のあり方（人と人との関わり方）、および(3)コミュニケーションの手続きが独自の方法で形式化されているということがわかる。スピーチ・コード理論はことばのなかにコード化されたこのような三つの要素を当事者の視点からとらえた上で「厚い記述」(Geertz, 1973)によって解明しようとする。

このような特異性だけではなく、スピーチ・コード理論はコミュニケーション行動の普遍性にも注目する。Philipsenは上述の広範な事例研究の横断的研究で、(1)感情表現が非言語コミュニケーションを通してなされることと、(2)人の呼称の選び方や会話の順番がどのように維持されるのかについてはいずれの言語共同体においても何らかの構造化が見られる点などを普遍的な原則として挙げている。各言語共同体によって「人」・「社会」・「コミュニケーション」に関するコード化の詳細は異なるが、コード化がなされるという点において普遍的である。

もうひとつの公理はコミュニケーション行動がもたらしてくれる成果について述べたものである。

公理2：コミュニケーション行動は言語共同体とそこで生きる個人にとってスピーチ・コードの発見を助け、共同体の文化を体現するための文化的リソースである。(Philipsen, 2002, p. 59)

幼児や新参者が臨地でのコミュニケーション行動を会得しようとする場合、共同体における日常的な会話をまず観察し、継続的にそれに親しんでいくなからスピーチ・コードが会得される。独特な文化的語彙やシンボルを理解し、文化的コミュニケーションの手順とそれが意味することを理解できるようになるきっかけもコミュニケーション行動そのもののなかににあるということになる。スピーチ・コードはことばを制御する働きがあるが、実際のことばにふれることで我々は背後のスピーチ・コードを発見し、文化的コミュニケーションを理解するのである。その点においてことばは言語共同体の日常を深く理解するための発見のリソースであると言える。

「共同体の文化を体現する」リソースでもあると言えるのは、共同体の各メンバーは共有されたスピーチ・コードを活性化することによって自分の出自を明確にし、相手との親密感を確立できることを考えれば明らかである。イスラエル生まれの生粋のユダヤ人(Sabra)の間で交わされるdugri speechは、敬意表現を排した単刀直入な、外集団の者からすればけんか腰とも思えるようなスピーチであるが、こうした会話に参加することによって、Sabra文化を自分で体現し、ユダヤ人の剛毅なエトスを共有することができる(Katriel, 1986)。このようにコミュニケーション行動はコードを学ぶためのリソースとなるだけでなく、メンバーが文化的コミュニケーションに参加し、個人のアイデンティティを確立するためのリソースでもある。

Ⅲ. スピーチ・コード理論の五命題と事例研究

こうした原理に基づいてPhilipsen (1997) はスピーチ・コード理論を五つの命題にまとめている。同命題はGriffin (2003) によって著されたコミュニケーション理論の入門書にも取り上げられている。次節ではこれらの命題を既存のことばの民族誌研究およびコミュニケーション研究の成果を交えながらわかりやすく紹介する。アメリカの地域民族文化を対象にした研究に限定することによって、単にスピーチ・コード理論の内容を理解するだけでなく、アメリカの民族と文化、特に「自己」の意識と「社会」の意識について考察する。

命題 1：独特な文化が存在するところには独特なスピーチ・コードが存在する。

この命題は上記の公理 1 の基盤を成している。固有な文化を共有していると認められるグループにおいて一定のスピーチ・コードが認められる³。そのコードを共有しない外部の者にとっては発話者の意図していることを的確に理解することは難しい。不可能ではないにしても、当該共同体のメンバーが理解する内容で理解することは困難になる。もちろんそれはスピーチ・コードを共有していないからにはほかならない。

アメリカ北西部で行ったKatriel & Philipsen (1981)の研究によると、ナシレマ (Nacirema; Americanの逆綴り)文化においては、「親密」(close)で、「協力的」(supportive)、「柔軟」(flexible)なコミュニケーションが真のコミュニケーションである。この種のコミュニケーションの欠如はJoanna Kramerのケースのようにアイデンティティの危機をもたらす (Philipsen, 1992)。人と人のつながりについても「仕事」のメタファーが多用され、夫婦関係や親子関係でさえ、(仕事と同じように)常に努力を払わなくては成立しないという意識が共有される。そしてここで言う努力(仕事)とはほかでもないナシレマ式「コミュニケーション」である。

これらの自己意識や社会観は、シカゴ近郊のTeamsterville (偽名)で行われた研究結果とは非常に対照的である (Philipsen, 1972, 1974)。Teamstervilleにおいてコミュニケーションは玄関先や街角、飲み屋といった特定の場所で、顔なじみの者同士で積極的に行われるものであり、見知らぬ者と井戸端談義にこうずることはまずない。悪ふざけをする子どもに対してことばで諭すことは不要で、何らかの肉体的制裁を加えるのが常套手段である。他人にののしられたり、侮辱されたような場合でもことばは賢明な問題解決の手段ではない。このようにことばはそれぞれの共同体においてその評価が異なり、人々のコミュニケーション行動に関する感受性も多様性に富んでいる。同じ英語を話す人たちの間でこのように多くの相違が生じることはコミュニケーション行動そのものよりも更に抽象化されたスピーチ・コー

³ スピーチ・コードを共有しているからこそ一定の言語共同体として認められることを考えると、この命題は循環論に陥る可能性がある。しかし、それは文化とことばが表裏一体であることを端的に示しているにすぎず、ここではスピーチ・コードという解釈の枠を適用しないとことばの理解がおぼつかないことに注目したい。スピーチ・コードはある境界線を示唆するものであるが、その境界線は社会生活のなかで縦横に幾重にも折り重なって存在すると考えられる。

ドの視点がないと説明がつかない。

命題2：スピーチ・コードは文化的に独特な心理と社会とレトリックを含意する。

この命題を理解するにはどのような場面でことばを差し控えるかをまとめたBasso (1970) の研究を見てみるとよい。Western Apacheの人々を対象に行った民族誌研究によって明らかになったことは、次のような状況において多弁を慎み、沈黙を守ることである。

1. 見知らぬ人に会ったとき
2. 好きな相手といるとき (求愛 [courting] するとき)
3. 久しぶりに子どもが帰ってきたとき
4. 罵られたとき・悪口を言われたとき
5. 悲しみにくれている人といるとき
6. 癒しの儀式の席で

これらの結果を踏まえてBassoは仮説を提示する。「ある状況において相手との対人関係が不明瞭で予測がつかないときには沈黙が適切である」という仮説である。先述の状況は全て予測不可能な状況に該当すると言える。求愛の場合は相手の気持ちを察し得ず、寄宿学校から何年かぶりに帰省した子も留守の間にどのように変わったかわからない。怒った人は何をするかかわからず、悲しみにくれている人も平常心ではないためことばが災いすることもある。癒しの儀式の席で呪術師は神と交信中であり、人の能力でははかり得ない世界にいると考えられるためことばは慎まれる。Bassoの仮説はWestern Apache共同体におけるスピーチ・コードの概念をよく言い当てていると言える。

やがてこの仮説はBraithwaite (1990) によって検証され、ほかの言語共同体においても同様な行動の規範が存在することが確認された。これに加えてBraithwaiteは対人間の力関係に隔たりがある場合も同様にことばが慎まれ、沈黙が保たれることを確認している。一見スピーチ・コードの普遍性を説いた結論と捉えられるが、具体的にどのような状況を対人関係の予測が難しいと捉え、力関係に隔たりがあると認識するのは言語共同体によって異なる。それは日本人やナシレマ文化の人が上記の1～6の状況でどのように振る舞うかを考えても明らかである。

Western Apacheの例に見られるように、ことばのコードは（この場合はことばを使わない状況にまつわるコード）は発話者が自分自身をどのように捉え、相手とどのような関係にあるのか（もしくは築こうとしているのか）といった事と深く関わっていることがわかる。自他の関係はすなわち個人と社会との関係を示し、スピーチ・コードはそのような関係を一定の方向に導くと言ってよい。同時に個人と社会との関係を維持し、強固なものにし、改変したりするのもコミュニケーション行動によって行われるのであり、その具体的な方法は様々である。この点においてスピーチ・コードはそれぞれの共同体のレトリックに対する志向性を示していると言える。

命題3：ことばの重要性はコミュニケーション行為の意味を構築するために話し手と聞き手が用いるスピーチ・コードによって異なる。

悪ふざけをする子供を優しくたしなめてしつけようと試みた作者が「男らしくない」と受け止められた例 (Philipsen, 1972) からわかるように、Teamstervilleのスピーチコードにおいては、ことばの価値が相対的に低下する。ナシレマ文化においては模範的な行動も異なるスピーチ・コードにおいては冷遇されることが多い。

似たような研究はCarbaugh (1993) によっても報告されている。コミュニケーション行動の重要性そのものではないが、コミュニケーション行動の解釈もスピーチ・コードが変わることによって大きく異なる。ロシア人とアメリカ人を交えて行われたDonahue Showにおいて、私生活に関するトピックに関して公開討論の席で自由闊達な意見を述べるアメリカ人に対して、ロシア人はそれを不適切と見なし、内容の変更を要望する意見があったことが報告されている。それだけではなく、公開された状況においてアメリカ人の参加者が、個人の内なる感情をあからさまに表現するのに対し、ロシア人は公の場では個人として話すよりもグループとして道理にかなったことをグループの代表者として話すことを尊ぶ様子がトランスクリプトの綿密な分析に基づいて報告されている。そうした「自己」と「社会」に関する志向性の違いがもたらす会話のもつれは、やはりスピーチ・コードの及ぼす深い影響を示している。

Kotani (2002) も"I'm sorry."という発話の解釈が日米間のコミュニケーション行動において異なることを報告している。綿密なインタビュー調査によって、日本人の発話者が伝えようとする感謝と恩義の念をアメリカ人は不誠実であると捉える可能性があることを報告している。ことばと気持ちの一貫性を求めるアメリカ人にとっては、"I'm sorry."という発言は発話者が自分の責任を認めることを明示するが、相手に恩義を感じて"I'm sorry."と発言する日本人の習慣とはその意図するところが大きく異なる。両者の間に横たわる大きな溝を埋めるためには、発話者と同じ文化的解釈のフレームを会得し、発話者の立場から解釈することをKotaniは唱える。"I'm sorry."という発話行為ひとつを取り上げて命題3にある「ことばの重要性」そのものが異なるとはいいがたいにしても、こうした事例によって少なくともことばの意味はそれを取り巻くスピーチ・コードによって大きく左右されることがわかる。

本題の「自己」と「社会」という視点から言うと、"I'm sorry."という表現は人と人がどのように関わるべきかを具現した最も顕著な日常ことばではないだろうか。英語話者の間では、自分に非が認められる場合には、自立した個人としてその責任を認めた上で相手との関係を対等なものに是正すべきであるというのがスピーチ・コードに含意された「個人」であり、「社会」と言える。それに対して日本人女子大学生のスピーチ・コードに含意された「自己」は人と人の間に存在する間人主義的 (浜口, 1982) な存在であり、社会的な人のネットワークを抜きにしては概念化できない。「自己」と「社会」が表裏一体の存在として想定されているスピーチ・コードのもとでこそ「謝罪」と「感謝」の気持ちが矛盾なく同一の表現で伝えられると言える。

命題4：スピーチ・コードの語彙、規則、前提条件はことばそのものと密接に絡み合っている。

この命題は特定の言語共同体に独特なスピーチ・コードを発見することができる「場」を示している点で興味深い。スピーチ・コードを発掘するためにPhilipsenが注目したのは、(1)話し方のパターン、(2)コミュニケーション行動を対象に用いるメタ表現（コミュニケーションについてのコミュニケーション）、(3)共同体に特有な概念を招来するレトリック、(4)共同体に特有な高度に構造化されたディスコース（神話的語り、儀式化された相互行為、社会ドラマの展開）などを挙げている。（社会ドラマは通常、〈規範からの逸脱〉－〈危機のエスカレーション〉－〈矯正活動〉－〈秩序の再構築〉といった経過で展開する。）これらは特殊な機会に行われるものではなく、日常のコミュニケーション行動に散在するというのが命題4の趣旨であるが、フィールドワークを実際に行う者にとっては明確な研究方法の視点を提供している点で貴重である。むしろ方法論的要点を掲げた命題であると捉えた方がよい。

そこで上記(1)～(4)の手法を用いた事例研究を簡単に紹介する。（紙幅の制約上、ここでは簡単な紹介に留める。）(1)話し方のパターンに注目するためにことばの民族誌の分析フレームワークを利用した研究にGoodwin (1990) が挙げられる。Maple Streetを中心とした黒人が多い共同体において子どもたちの遊びのシーンを観察し、ことばを巧みに使って子どもたちがお互いのアイデンティティを確立し、仲間の中で序列化を達成していく様子が詳細に記述されている。その際、注目したのが、命令・依頼－返事、"He-said-she-said" に代表される相手の非難と告発、うわさ話の構造などに見られる話しことばのパターンである。

「コミュニケーション行動を対象に用いるメタ表現」とは前述のナシレマ共同体における、「親密」(close)で、「協力的」(supportive)、「柔軟」(flexible)なコミュニケーションというような場合に用いられる濃密な意味を持ったメタ表現である。また "Communication is work on one's 'self' and 'relationship.'"などのメタファー表現に見られる文化的なカテゴリーとして"communication"に言及したメタ表現などのことである。このようなメタ表現に注目することによってもスピーチ・コードを把握することができる。

共同体に特有な概念を招来するレトリック(3)と共同体に特有な高度に構造化されたディスコース(4)については、Philipsen (1992) によるデリー市長の弁明のスピーチ分析が最も示唆に富んでいる。縁者びいきをある大学教授に非難された市長が市民に向けて行ったスピーチは社会ドラマの手続きを踏襲している。〈市長の人事に対する非難〉－〈威信の喪失〉－〈威信の修復〉－〈市長としての地位の再構築〉といったエピソードの段階的展開が彼のスピーチには連綿と流れている。汚名撤回そして威信修復のために招来されたスピーチ・コードは「名誉のコード」("codes of honor")（「尊厳のコード」・"codes of dignity"に対するTeamstervilleのスピーチ・コード）であり、彼の抗弁にはこのスピーチ・コードの要素が顕著に見られた。そこに描かれているのは家族を守るために闘う男であり、まやかしの恐怖に脅えることなく闘う男の姿であり、「名誉コード」に則った真実を追究する男の姿である。スピーチを通して市長はTeamstervilleのスピーチ・コードを呼び起こし、市長としての名誉を取り戻すことに成功する。スピーチの内容を側面から支えているコードがここでも社会ドラマを通して追体験できる。

命題5：共有されたスピーチ・コードを巧みに使えるということは、特定のコミュニケーション行為を（スピーチ・コードに則った方法で）理解可能で、賢明な、そして道徳的なものにする（メタ表現を含めた）ディスコースの形態を予測し、説明し、制御するために十分な条件である。

命題5はスピーチ・コード理論の理論的な実効性を高めようとするPhilipsen（1997）の試みであることは明らかである。人は必ずしもスピーチ・コードに盲従するだけではなく、時には鼻であしらい公然と無視することもある。そうした自由意志を持った人がスピーチ・コードに則った行動に出るのはどのような状況の場合で、どのような条件が必要であろうか。換言すると、スピーチ・コードはどのような力で話し手と聞き手にはたらきかけるのだろうか。それを明らかにすることがスピーチ・コード理論の実効性を高めることにもつながる。

この命題を理解するためにわかりやすい例を挙げよう。前掲のPhilipsenの論考からであるが、ナシレマのある家庭において夕食時に家族でテーブルを囲んでいる状況で、「これから夕食が終わるまで黙っていなさい」と子どもに注意した父親に対して、後になって母親が「それでは打ち解けないし、子どもがあなたのことを嫌いになりますよ」と苦言した例が示唆に富んでいる。「打ち解けない」というのは"uncommunicative"という語を使っており、「子どもがあなたのことを嫌いになりますよ」という表現と併せてコミュニケーションについてのコミュニケーションという性格のものであり、典型的なメタ表現である。このようなメタ表現を適切に理解するには、その発話を「理解可能で、賢明な、そして道徳的なディスコースの形態」として認知するために不可欠な共有のコードが必要になる。この場合はコミュニケーションを通しての人と人の結びつきを神聖なものを見なすナシレマのスピーチ・コードがそれに当たる。視点を替えるとスピーチ・コードに違反した行為（「これから夕食が終わるまで黙っていなさい」）に対して巧みに同じスピーチ・コードに準じたメタ表現を用いてスピーチ・コードの構成要素をなす価値基盤を喚起することによって均衡をもたらすことができる。このような状況でスピーチ・コードが力（force）を発揮する。

「それでは打ち解けないし、子どもがあなたのことを嫌いになりますよ」というコメントに対して父親が実際にどのような返事をするかは予測できない。ただし、このコメントによって招来されたスピーチ・コードに沿って「理解可能で、賢明な、そして道徳的なディスコースの形態」はどのようなものになるかを予測することは可能であろう。文化的に濃密な意味をもつ語彙、比喩表現、神話的語り、儀式化された相互行為、社会ドラマの展開といったこれまで概観したようなディスコースの形態のいずれも該当すると言える。もちろんその予測を可能にするのは、コードが共有されたものであり、意味と価値体系のネットワークを形成しており、社会的相互行為のなかで獲得され認知されたものであるからに他ならない。命題5はその意味でどのような状況でスピーチ・コードが招来され力を発揮するかという疑問に答えるだけにとどまらず、なぜスピーチ・コードが人のコミュニケーション行動に大きな影響を及ぼすことができるのかを示している。

IV. アメリカ研究との接点

ことばの民族誌研究の伝統から発展したスピーチ・コード理論の理論的基盤をアメリカの社会を対象に行った事例研究を通して見てきた。ことばの民族誌が非常に豊富な成果を擁していることはPhilipsen & Carbaugh (1986) からも明らかであり、ここで取り上げたわずかな事例研究は一握りのものでしかない。しかし、少ない事例を見ただけでもアメリカの「自己」と「社会」を取り巻く文化環境は非常に多様であることがわかる。スピーチ・コード理論は、ことばを更に抽象化したコードという概念を用いることによって、人種、民族、階級、地域などの従来の視点とは異なる方法で（コードを共有した）文化を特定し、コードを形成する要素を記述することができる。Philipsen (1992) のナシレマにしても、アメリカ人全体を指すわけではなく、特定の地域の集団や、ある種のグループを指すわけでもなく、それは一定の歴史を共有し、現代を生きる生活の素地を共有する「文化」であると述べている(1992, p. viii)。アメリカ社会を縦横に織りなす下位文化を発掘し、黙殺されてきた文化の声を聴くための手だてをスピーチ・コード理論は与えてくれるのではないか。公理2にもあるように、スピーチ・コード理論が土着の意味やコードの発見を促進する機能を持っているということは、より多様な文化の発掘と理解につながると言える。

Kase (2000) もこの点に注目し、観察者側の一方的な解釈に対するポストモダン批評に応えるべく、民族誌の研究は対話法を取り入れた重層的なアプローチで、多様な文化の声を聴くべきだと主張している。文学や歴史学を中心に行われてきたアメリカ研究は、残念ながらテキスト研究や古文書研究によってアメリカの過去と現在の経験を満足いく方法で説明しえていない (Kase, 2000, p. 1) ことをふまえると、民族誌学とコミュニケーション学のパラダイムでアメリカ研究に望むことは、新たな発見と成果につながるであろう。

スピーチ・コード理論はBernstein (1970) が提唱した"elaborated codes"や"restricted codes"と共通するコードの概念を用いて特定の文化の深層を記述できるという点においては同質のものである。しかし、スピーチ・コード理論はBernsteinの解釈のフレームワークとは異なり、コードを発見するための道具としても利用できる点で優れている。Hymes (1962) が当初から目指していたヒューリスティック (heuristic) な理論モデルはPhilipsenに至って更に拡充されたことは命題4を見ると明らかである。アメリカ研究においてもこうした発見を促進する理論モデルを活かすことによって新領域を開拓できるのではないだろうか。アメリカを異文化として研究する人はこの点において有利な地位にあるといえる。魚には水の存在を知ることが難しいように、異文化の対する感受性は自文化に対する感受性よりもはるかに高いからである。

参考文献

Basso, K. (1970). To "give up on words": Silence in the Western Apache culture. *Southwestern Journal of Anthropology* 26: 213-30.

- Bauman, R. & Sherzer, J. (1989). *Explorations in the ethnography of speaking*. (2nd Ed.). Cambridge: Cambridge University Press.
- Bernstein, B. (1970). Social class, language and socialization. In P. P. Giglioli (Ed.), *Language and social context* (pp. 157-178). Harmondsworth, Middlesex, England: Penguin Press
- Braithwaite, C. (1990). Communicative silence: A cross-cultural study of Basso's hypothesis. In D. Carbaugh (Ed.), *Cultural communication and intercultural contact*. (pp. 321-327). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Burke, K. (1969). *A rhetoric of motives*. Berkeley: University of California Press.
- Carbaugh, D. (1993). "Soul" and "Self": Soviet and American cultures in conversation. *Quarterly Journal of Speech*, 79(2), 182-200.
- Carbaugh, D. (Ed.). (1990). *Cultural communication and intercultural contact*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Condon, J. C. & Yousef, F. S. (1975). *An introduction to intercultural communication*. New York: Macmillan.
- Geertz, C. (1973). *The interpretation of cultures*. New York: Basic Books.
- Goodwin, M. H. (1990). *He-Said-She-Said: Talk as social organization among black children*. Bloomington: Indiana University Press.
- Griffin, E. (2003). *A first look at communication theory*. (5th ed.). Boston: McGraw-Hill Higher Education.
- Gumperz, J. J. & Hymes, D. (Eds.). (1972). *Directions in sociolinguistics: The ethnography of communication*. Oxford: Basil Blackwell.
- 浜口恵俊 (1982). 『間人主義の社会 日本』東京：東洋経済新報社
- Hymes, D. (1972). Models of the interaction of language and social life. In J. J. Gumperz & D. H. Hymes (Eds.), *Directions in sociolinguistics: The ethnography of communication* (pp. 35-71). New York: Basil Blackwell.
- Hymes, D. (1962). The ethnography of speaking. In T. Gladwin & W. Sturtevant (Eds.), *Anthropology and human behavior* (pp. 13-53). Washington, D.C: Anthropological Society of Washington.
- Kase, T. (2000). Ethnography in American studies. *Shikoku Gakuin University Treatises*, 102, 1-21.
- Katriel, T. (1986). *Talking straight: Dugri speech in Israeli Sabra culture*. London: Cambridge University Press.
- Katriel, T., & Philipsen, G. (1981). "What we need is communication": "Communication" as a cultural category in some American speech. *Communication Monographs*, 43, 301-317.
- Keating, E. (2001). The ethnography of communication. In P. Atkinson, A. Coffey, S. Delamont,

- J. Lofland & L. Lofland (Eds.), *Handbook of ethnography* (pp. 285-301). London: Sage.
- Kotani, M. (2002). Expressing gratitude and indebtedness: Japanese speakers' use of "I'm sorry" in English conversation. *Research on Language and Social Interaction*, 35(1), 39-72.
- Philipsen, G. (2002). Cultural communication. In W. B. Gudykunst & B. Mody (eds.), *Handbook of international and intercultural communication* (2nd ed., pp. 51-67). New York: Sage.
- Philipsen, G. (1997). A theory of speech codes. In G. Philipsen & T. L. Albrecht (Eds.), *Developing communication theories* (pp. 119-156). Albany: State University of New York Press.
- Philipsen, G. (1992). *Speaking culturally: Explorations in social communication*. Albany: State University of New York Press.
- Philipsen, G. (1987). The prospect for cultural communication. In D. L. Kincaid (Ed.), *Communication theory: Eastern and Western perspectives* (pp. 245-254). New York: Academic.
- Philipsen, G & Carbaugh, D. (1986). A bibliography of fieldwork in the ethnography of communication. *Language in Society*, 15, 387-398.
- Schiffrin, D. (1994). *Approaches to discourse*. Oxford: Blackwell
- Turner, V. (1980). Social dramas and stories about them. *Critical Inquiry*, 7(1), 141-168.
- (みやひら・かつゆき、コミュニケーション論)